

当 芒 野

の 残 照

養老山麓

歴史物語



牧田川暮情^{まさた}

名神ハイウエー関ヶ原のインターを出て、南下すると、右に藤古川が流れる山の狭間を通り抜ける。関ヶ原インターやゴルフ場が出来て、大増な変り様であるが、それでも旧道を鳥頭坂^{トリカビ}にかかると、往昔の街道の面影をはっきりと見る事が出来る。懐かしいと思う心に其の処の歴史が、重さとなって足が留どまる。

古き道を西に東に通り過ぎた人々の面影が、己の陰影と重なって、更に形がくつきりとして来るのである。

関ヶ原の合戦で、あの勇猛の若武者、島津豊久が、井伊直政、本多忠勝らの追撃に合い無念の討死をした所と云われているのが此の辺りで、生い茂った叢の中に、若干三十才の豊久の碑がポツンと建っている。訪れる時が秋の夕暮なら、西の伊吹の空があかね色に染められてひと

しお寂寥の思いが深まるのである。

まばゆい東の陽光を一杯に受けて、その先、濃尾平野が広がってゆく其の口元に、広瀬橋が架かっている辺り、いつ頃から、そしていつ頃迄か明確ではないが渡しがあつたと云う。何んともぶえぬ良い風景である。

「徳川家康」（山岡荘八）によると

先を行く島津勢の数は見る間に減って精々ハト騎程しか残っていない。戦い馴れた直政の眼には、其の中に義弘が居る事は掌を指す様に良く判った。……………もう道の行く手に牧田川の渡しが見える。其れを越えさせては伊勢路へ落とす事になる。

いずれにせよ直政は河原に馬を近づけた。辺り一面、すすきが原で、島津義弘らしい人影は前方一、三十間に迫っている。「しめたー」そう思った瞬間、直政は島津勢の銃玉に股を貫かれ、氣を失った。急迫の矢はここで止まった。すでに

辺りは暗くなりかけて、島津勢の先頭は、牧田筋を多羅山めざして糸を引くように雨露の中を遠ざかつていった。



此の辺の清流の螢は美しかった。古来から旅人の心を慰めてきた。螢が群をなして飛び交い、流れるように、渦を巻くように、高く群れ、低く舞って、美しい幻想の世界を描き出してくれた。今ではハイウエーを東西に走る車のライトが行き交うのみ、赤いテールランプが東の夕暗中に真一文字に吸い込まれてゆくさまはスピーディーな現世の詩情なのだろうか、やはり物悲しいものである。

此処は美濃中道^{みなのちゅうだう}、俗に牧田街道と呼ばれる古道で、沢田を経て烏江港に至るのである。



望子望野

里

あずさ山みのの中道たえしより
我身に秋のくると知りにき

(曾丹集 曾根好忠)

白鳥神社の所より南桜井を経て山麓に古道がある、御幸街道とも呼ばれる伊勢路である。壬申の乱には大海人皇子の吉野の軍兵が、

疾風の如く不破の関にかけつけた道で、なだらかな扇状地帯の松林が穏やかに南に霞んでいる。

山脈の右の方、少し窪地の村が桜井部落である。かつて此の地の生人で、国学者田中道磨が、

きさらぎと春さりくなる名ぞしるき
花咲き匂ふ桜井の里

と詠っている所である。此々に鎮座する、白鳥神社は倭建命を祀る。神社の由緒によると、境内の井戸は日本武尊の伊吹山より御還りの砌、此の処に休息なされ、此の水を汲みて賞味したまい「水甘



美にして其の味、桜の如し」と、のたまへりと、伝える。

心の奥に、あの桜の花のうるはしい大和の国への思慕があつたのではなからうか。ミコトの静かな歓びの心と悲哀の響

きの心が感ぜられるのです。だから、ひととき安らぎを得た桜井の里に白鳥となつておもどりになったものと想うとき更に胸のつまるおもいがするものです。

此の辺りで発掘された古墳は蘇我石川宿禰四世の孫、稲目宿禰に続く氏族、皇別桜井朝臣の墳墓であつたと云われる。人骨五体と五振の直剣と多くの須恵器が副葬されてあつたと記録に残る。

古代に於いては大和朝廷の畿内から東に向けての最前線其の地であり、戦乱の絶える事の無い土地柄でもあつた。路傍の石仏が物悲しく、歴史の重みを語っているのである。

日本武尊追憶

俳聖・芭蕉翁が、戸を開ければ西に山あり、伊吹という。花にもよらず、雪にもよらず、只これ狐山の徳あり。とよんだ神祕なる山に連なる養老、多度の山脈は、伊勢の神々の山へと続いて行きます。

伊吹の山の頂にヤマトタケルノミコトの石像がいつの代からか、ポツンと、しかしりりしく建っています。悲劇の英雄の物語を残す山として印象深く、更にこの山から連なる養老山麓当芸野の上でミコトの最後の壮絶で劇的な物語を「古事記」は誦いあげている。

ミコトの通過なされ、そして天正天皇の多芸の美泉へ行幸路ともなった此の古道を「みゆきみち」といっております。

古事記の編纂者太安万呂が此の美濃池田郷に出生したであろうと想うとき、安万呂が年少の時、いつも望見したのであろう伊吹の峰を人格化し、美濃に美姫を定めて物語の詩的叙述をたかめてゆく、ヤマトタケルノミコトの叙事詩は、



まさに圧巻であり、真実せまり、美濃への愛着と讃歌が生々しく感ずることが出来るのです。

日本武尊の悲劇は、兄オオウスノミコトが父にめされた三野の国の造の一人の女を自分のものにしてしまったことから始まります。(その子等が鵜沼村国男依と武儀身毛君広の祖であるという) 一気のひけるオオウスノミコトは朝夕の食事にも顔を出さないで、父景行天皇は、さとうすよう弟オオウスノミコトに仰

せられる。しばらくしても顔を見せないで、「どうした兄をさとしたか」とおたずねになると「既にねぎつ」「つかみひしぎ手足をもぎとつてこみに包んで投げ捨てた」という返事。天皇はその猛く荒き心を恐れて西方のクマソの討伐を命じられる。ミコト御歳十六という。

ミコトの九州に於けるクマソ討伐と日本武尊の命名、天叢雲剣と草薙の剣の物語、妃の弟橘姫の走水の海への入水と悲劇の物語が長く長く続く。

日本武尊は、長途の討伐行から尾張の熱田の宮に帰って、ミヤズ姫と愛の歌をかわされる。

物語は又転じて、悲劇の叙述となる。

留まりて月の経たぬまに、伊吹山の荒ぶれ

る神の征伐の命令が下る。

ミコトは「天皇はわれを早く死ねとやおぼすらん」と嘆き、ミヤズ姫との悲運の離別を誦う。

伊吹山の荒ぶれる神にさんざんな目に合い、しかも氷雨にうたれ、風邪であらうか、高熱で病重く、息たえだえになつて山を下り関ヶ原の玉倉部の清水で休まれ、牧田川の狭間を抜けて、養老山麓を南下される。熱田のミヤズ姫のもとへ——。大和なる神々の故郷へ、心は空を翔り行くのである。

養老山麓、滝の流水が造つた扇状地帯の古米、当芸野の千人塚と云う辺り「日本武尊当芸野」の標識を建てる。いくつかの古墳群をみとめる所に上下して古道の名残りを其処にさがしあてることが出来る。

古事記は、

尊、当芸の野の上に到りました時に

「吾が心 恒は 虚よ翔り行かむと

念いつるを 今吾が足得歩まず

たぎたぎしくなりぬ」と詔りたまひき

カレ其地を名づけて当芸という と

タギの名及びタギの地名がここに発すると考えてよからうか。

古事記は更に



伊吹山の荒ぶれる賊

にさんざんな目に合つて、しかも、氷雨にうたれ、病重く、息たえだえのミコトが

「天皇吾を死ねとおぼすらん」と悲運をうったえる慟哭の一節を強く加える。当芸野はるか伊勢の山々、熱田へと広がる平野の彼方大和の故郷を想つて

「倭は国のまほろば たたなづく青垣

山隠れる 倭し美はし」

と国思歌を誦い 悲劇のミコトは伊勢の能煩野で息絶えて「ミコトは白鳥となつて天翔り去りぬ」と語る。

伊吹山は日本海の風雪を西にう

け、東は拡大な美濃平野の陽の光を浴びている。陰と陽が四季絶えまなく動く所である。関ヶ原のやまあい自然の最もきびしい所でもあり、こゝを東に抜けると、平野の拡がり、心を和らげるのである。



孝子ばなし

孝子物語は、鎌倉時代に成立された説話集である「十訓抄」に収録され、二年後に橘成季が編纂した「古今著聞集」によって説話文学として日本人に親孝行の美徳をうえつけ、家族制度の要となったのです。

昔、元正天皇の御時、美濃の国に貪しく賤しき男ありけり、老いたる父を持ちたりけるを、この男 山の草木を取りて、その価を得て、父を養ひけり、この父朝夕あながちに酒を愛しほしがりければ、是によりてこの男なりひさこというものを腰につけて酒をうる家に望みて常にこれを乞ひて父を養う。ある時、山に入りて、薪をとらむとするに、苔深き石にすべりて、う



滝広場の続日本紀標柱古今著聞集



つぶしにまろびたりけるに、酒の香しければ、思はずあやしみてそのあたりを見るに石

の中より、水の流れ出づる所あり、その色酒に似たりければ、汲みてなむるに、めでたき酒なり、嬉しく覚えて、その後、日にこれを汲みて、あくまで父を養ふ。時に常、この事をきこしめして 靈龜三年九月二十日に、その所へ行幸ありて、観覧ありけり、これすなわち、至孝のゆえに、天神地祇あはれび、その徳をあらわすと感ぜさせ給ひて、後に美濃守になされけり、家ゆたかに成りていよいよ孝養の心ふかかりけり、その酒の出づる所を養老の滝と名づけられけり（中略）これによりて、同十一月年号を養老と改められけるとぞ（古今著聞集）

ところがこの説話のもとである「続日本紀」によると、孝子の話もなく、酒のことも出て来ません。老も若やぐ、薬の水としての靈験が大瑞となつて改元にまで到らしめた大事業が記述されております。

元正天皇の行幸と醴泉^{れいせん}

靈龜三年（七一七）八月、元正天皇は多治比真人広足を美濃国に派遣して不破郡に行宮の造営を命じ、九月十一日平城京を出発して近江国を経て一七日美濃国の行宮に至り、二〇日当耆郡に行幸して多度山の美泉を觀。十一月一七日養老と改元され、美濃国司と当耆郡の郡司らに官位一階を進め當耆郡は来年の調庸を免除された。

この史実は、当地にとって極めて重要な関係があるので、「続日本紀」の原文を讀下して載せる。

○十一月癸丑。天皇軒に臨みたまひ詔して曰はく

「朕、今年九月を以て美濃国不破行宮に到り、留連ること、数日。因りて當耆郡多度山の美泉を覽る。自ら手面を洗いに、皮膚は滑なるが如し。亦、痛む処を洗えるに、除愈えざるなし。朕が躬に在りて、甚だ其の驗有り。又就きて之を飲み浴する者は、或は白髪をも黒に反り、或は頰髪も更に生い、或は闇目も明らかなるが如し。自餘の痼疾も咸く皆平愈ゆ。昔聞く後漢漢の光武の時に醴泉出づ。之を飲む者は

痼疾も皆愈ゆと。符瑞書に

曰はく。醴泉は美泉なり、

以て老を養ふべしと。蓋し

水の精なればなり。寔に惟

るに、美泉は即ち大瑞に合

えり。朕、庸虚なりと雖も

何ぞ天祝に違はん。天下に

大叙して靈龜三年を改めて

養老元年と為すべし」と。

天下の老人の年八十已上に

位一階を授う。

……百才已上の者には絶三疋・綿三屯・布四端・粟二石を賜う。……八十已上の者には、絶一疋・綿一屯・布二端・粟一

石……老子・順孫・義夫・節婦は其の門閭に表して、身を終

るまで事勿らしむ。鰥寡・惻独・疾病の徒の自存すること能は

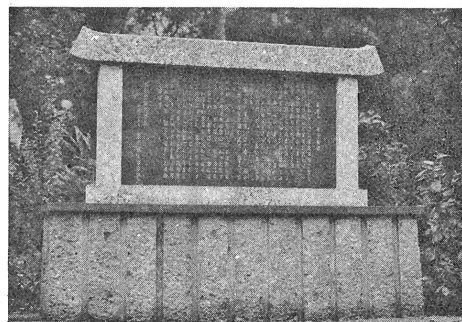
ざる者は量りて賑恤を加う。仍て長官を

して親しく自ら慰問して湯薬を加給せしむ……」

また不破・多芸二郡の当年の田租を免じ

さらに行宮造営奉仕の方県・武儀二郡の

百姓の租をも免じた。



孝子物語碑（養老寺境内）

○十二月丁亥。美濃国をして立春の暁、醴泉を挹^ぎて京師に貢せしむ。醴泉を為^なればなり。

天正天皇。女帝。在位九年。父、草壁皇子。母、天明天皇。

祖父、天武天皇。祖母、持統天皇。弟、文武天皇。天武八年（六八〇）生。靈龜元年（七一五）即位。養老行幸三十七歳。天平二十年（七四八）没。お人名、氷高^{ヒコタカ}。姫名、日本根子高瑞淨足姫^{ニッポンネコタカスミヨシタラシメ姫}。生涯、未婚の天皇であつた。

天武天皇の御子草壁皇子は、十一歳にして壬申の乱に従い、皇太子に立てられたが、即位前に死亡されたので、

天武の皇后が即位して持統天皇となり、孫にあたる文武天皇に譲位されたが、文武天皇も在位十年でなくなられた。そこで、遺児である首皇子（聖武天皇）の成長をまつて、祖母が、さらに叔母の元正天皇が即位された。いはば仲継の立場であつたのではなからうか。

壬申の乱の後、美濃は都にとって安心の出来る地方となつており、大宝二年（七〇二）持統太上天皇が巡幸されておりますが

靈龜三年即位までもない元正天皇が、何故にはるばる美濃の国へ長途の旅をなされたか。美泉の発見と、養老改元について考えみるのも興味ある事柄です。

奈良の都もおだやかではなかつた。全国的な疫病、飢餓と平



城遷都の大事業が農民の生活を圧迫することとなり、加えて律令政治が社会の暗影を濃くしていた。政界のトップにあつた左大臣石上朝臣麻呂が没して、右大臣藤原不二等が政界唯ひとり的大臣として実権を握ることとなりました。こんな時代でした。元正女帝は、オイの首皇子（後の聖武帝）が十七歳の年少の爲、仲継ぎの立場であつた。皇太子妃は不二等の娘（光明皇后）であり、不二等は、皇太子妃、そして藤原一門の前途の安泰を期する必要にせまられていた。四男の麻呂は未だ正六位下、美濃介であつた。早く官僚の列に加わることを念じていた。美濃の守は豪腕の笠朝臣麻呂であり、不二等としてはむすこをあずけている信頼のおける地方長官であつた。

社会全般を明るく、力強くひっぱつてゆく様な善政が望まれていた。というより、ヒットする政治の演出が必要であつた。美濃国守笠朝臣麻呂に相談あつたにちがいない。美濃には都の水を司どる部族として牟婁郡首^{ムロ郡首}の存在が大きくクローズアップされましよう。大瑞の演出の場は美濃でなくてはならなかつたし、美濃が最も都合のよい国柄でもあつたと解することが出来る。

不比等政権確立の爲の天皇行幸はかくしてなされたのです。美濃に美しい滝の流れがある

三年前に太安万呂が古事記を選上しております中に日本武尊の最後の晩歌、多芸野絶唱があります。タキの存在はすでに知られていたものと思はれます。「タド山のタキの野に到りまします時」と記述した、太安万呂は揖斐池田郷に年少の時代すごしたといわれておりますので、安麻呂自身も滝の存在を知っていたにちがいないからうと憶測出来ます。

多芸の行幸は、まず近江の国で琵琶湖観光がおこなわれ、山陰、山陽、四国の国司が参集して各国の歌舞を奏上した。不破の美濃国府では、東海道、相模。東山道、信濃。北陸道、越中以西

の諸国司来集して風俗の雑技を奏したとあります。かなり大がかりで、にぎやかな行幸であった。

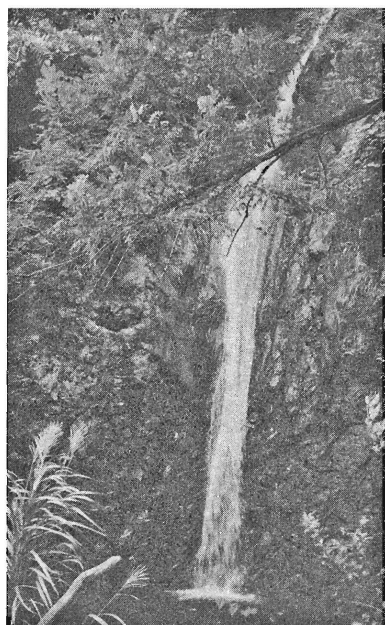
前述、続日本紀の原文の如く、叙位、恩賜、行賞がはなやかに行なはれておりますが、注目すべきは、「仍て長官をして親しく自ら慰問して湯薬を加給せしむ。……」とあり、後世、「薬の水」として珍重され、明和八年（一七七二）から明治の初頭まで約一〇〇年の間、岡本喜十郎翁四代の薬湯事業湯泉開発も故あることと考えられるのです。



十一面観音菩薩像（小浜市羽賀寺）
元正天皇を模して行基が造ったと伝える
十一面観音像

聖武天皇美濃巡幸

天平十二年（七四〇）九州で太宰少貳藤原広嗣が乱を起した。聖武天皇は反乱が畿内に及ぶことを恐れ、東国への行幸を企て十月二十九日、伊勢の国から伊賀、河口を経て、十一月二十六日美濃国当伎郡に到着、伊勢国高年百姓百才已下八十才已上者に大税を賜ひ、政府高官すべてに位一階を給はる。養老の地に四日間滞在あつて、十二月一日不破頓官に到る。四日騎馬隊を解き美濃の郡司及百姓労働有る者位一級を賜ひ正五位上賀茂朝臣に従四位下を賜ふ。近江路を経て十二月十五日山背国恭仁宮に都を定め給ふ。と続紀に見える。



まぐさの滝

従四位下賀茂朝臣は美濃国司であつたらうか。里伝によると聖武天皇は、養老公園の高山地域に都を定めようとなされたとか、此の地の南に戸数四十程の村落が「京ヶ脇」村と呼んでなごりをとどめている。又秣の滝は当時騎馬隊の馬糧を採取したのでその名があると伝える。

聖武天皇巡幸に供奉した舎人、大伴東人、大伴家持（当時十二歳）の万葉歌二首の歌碑が、天正、聖武両帝の行幸を物語つて今に伝える。

美濃国多芸行宮 大伴宿禰東人作一首

従古人之言来老人之 いにしへゆひとのいいくるおいびとの

変若云水曾名爾負滝之瀬 おつとうみすそなにおうたきのせ

（昔から人が言い伝えた老人が若かへる水なのです。この有名な滝の流れは）

大伴宿禰家持作歌一首

田跡河之滝平清見香従古たどかわのたきをきよみかにしへゆ

宮仕兼多芸乃野之上爾 みやつかへけむたきの野のほとりに

（そのむかし多芸の野でたどかわの清らかな滝をながめて宮つかへ申し上げました）

大伴家持はこの巡幸中河口（三重県）の行宮で歌一首

河口の野辺にいほりて夜の経れば

妹が手本し思はゆるかも

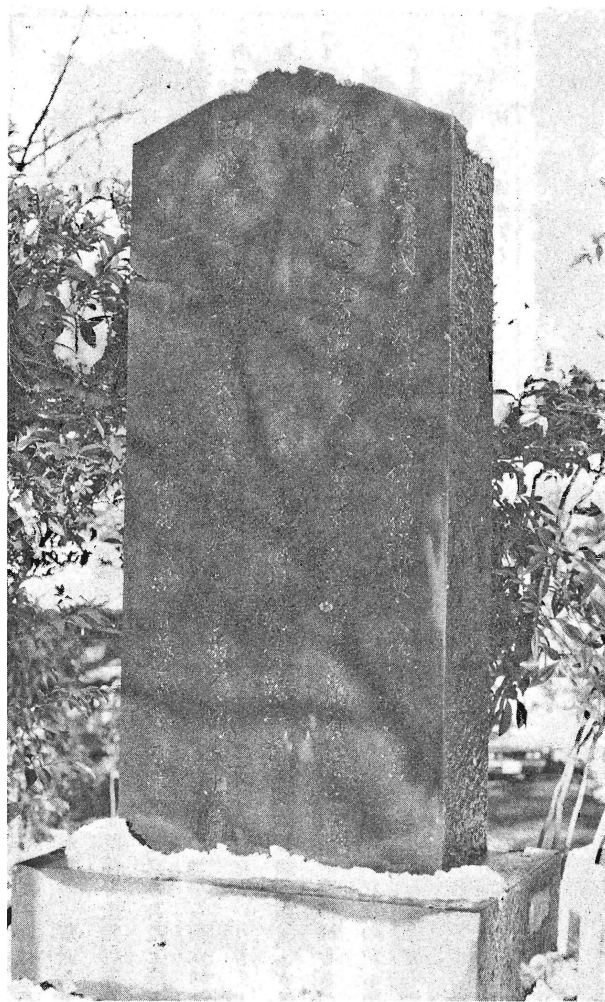
不破の頓宮で更に妻をしたいて

関無くばかへりだにもうち行きて

妹が手枕まきて宿ましを

この二首と多芸行宮での作歌とは、その内容を異としておる所から、多芸行宮の作歌は、家持、後年のものではないかと考へる。家持は此の巡幸供奉の後六年、二十八歳にして越中国司となつてゐる。高岡市の丘の上のスバラシイ所に銅像が建てられてあるが、舎人として馬上り、いい青年家持の姿を想像すると、千古の昔から、清らかなる滝の流れの底に騎馬姿の家持の

映像がゆれ動いてゐるようなさわやかさを感ずる。



万葉歌碑

養老神社

美濃国神名帳に從四位上養老明神とある、祭神は養老明神、天正天皇、聖武天皇、菅原道真である。境内の泉は水質極めて清冽で、養老孝子の汲んだ靈泉であるとも伝える。

神社に残る最古の棟札に永正元歲（二五〇四）とある。境内から十二世紀後半の経筒、和鏡三面が無釉瓶子に納まって出土して、何れも県重文に指定されている。

天正天皇行幸の所で美濃守笠朝臣麻呂公のことについて書いたが、祭神の養老明神がこの笠太夫であるかどうか、出土した宝物が、何う関係があるか。一二〇〇年以上も前の事で、しか



養老神社と靈泉

も度重なる戦乱の時代を経ておることとて資料に乏しく、難かしい。聖武天皇行宮の跡に其の後、天正院滝寿山養老寺が多芸七坊の一

つとして建立されたと伝える

るが、其の地から菊水の地に遷宮されたという考え方も推測にしかすぎず、永正

元年に村人が明神様をささやかに祀りしたのかも知れない。とすると経筒や鏡

は誰の持物で誰がいつの時代に埋藏したものか、歴史はなぞめいた所が面白いのである。心の憶測が人それぞれ異なっ

て思いが深まる。

ここで美濃国守笠朝臣麻呂公について、更に述べる。

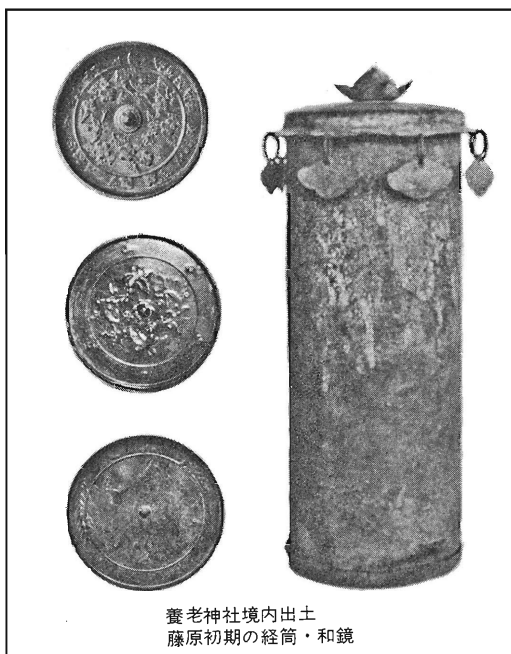
笠朝臣麻呂、推定五十才余、十三年の長い間美濃の国守の任にあつて、不破関整備、律令制の施行、岐蘇山道開通など、豪腕の貴族官僚として、数々の業績を修めた。靈龜三年天正天皇を「タド山のタキ」に御案内申し上げ、養老改元の政治的演出の立役者でもあったのです。これによって從四位上の階位に任



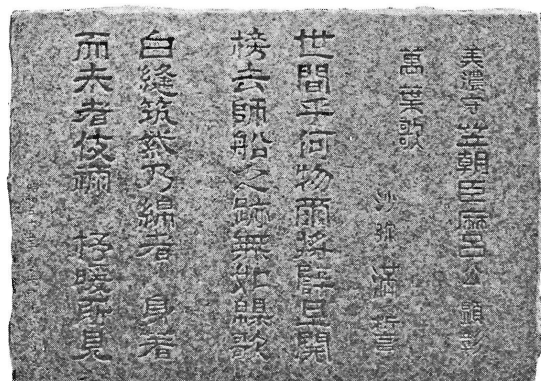
ぜられ、美濃、尾張、参河、信濃の按察使（国守より広域の長官）になり、養老四年官房長管の立場の右大弁に昇進しましたが、翌年官を辞して仏門に入り「笠沙弥満誓」と改めております。しかし、かつての政治手腕をかわれて再び官に付き、造築紫観世音寺の别当（長官）として養老七年九州に下る。

この筑紫で、太宰師大伴旅人、筑紫守山上憶良らと万葉歌壇の親交があり、寺婢との恋のエピソードを残し、太夫としてのその生涯の終りを飾ったのです。

養老神社の境内にその業績をたたえて、鏡・経筒などと一緒に



養老神社境内出土
藤原初期の経筒・和鏡



に出土した舟形石を台石として、顕彰碑があります。

よのなかを　なにに　たてゑむ　あきひろき
世間乎何物爾將辟旦開
こゝろにし　よのの　あどなきがごとし
榜去師船之跡無如鰈歌
しらぬのつくしのわたは　あにこそ
白縫筑紫乃綿者身著
いまだ　はまむ　あたは　みゆる
而未者伎禰杵暖所見

勢至の立岩と多芸七坊（八百比丘尼の伝説）

南から北に連なる養老山の北の峰に、その高さ十五米、上の広さが畳十枚程の巨岩があります。昔から里人が勢至の立岩と云っているもので、麓からもその大きさを望見することが出来ます。

八百年も長命の尼僧が若狭の国から、こ

の巨岩をかつて美濃の国

の入口まで持って来たの

だと云う。ごく簡単な

お話でありますけれど、

このことについて根本的な歴

史考察を加えてみますと仲々味のある

お話なのです。

福井県小浜にやはりこれと関係した八百比丘尼の伝説があります。

若くしてきれいな娘が、海の向うの不思議な魚を食べて、八百年も若々しく長生きしたというのです。後に比丘尼となって諸国を布教し、入寂したという岩屋もあります。この長命娘のブロンズの人魚像が、海浜に潮風を浴びて海を眺めている姿を



夕景の中に見るならば神々しさを感じるものでもあります。

この二人の比丘尼は同一人物なのです。養老の山頂にかついで来た巨岩、これは、仏の教えであり仏教文化であったのです。

又食べた不思議な魚は海を

渡って来た大陸の仏教文化

なのです。仏教が、若狭に上

陸し奈良の都へ、そして畿

内から東の国へと布教されて

ゆくことを示したものの考えら

れます。一たび信仰の道に入れば

人々は永遠に死なず八百年も生き永らうことが出来ると云う教えの物語と理解すれば、この伝説は納得の出来るものです。

仏教が我が国に渡来し、氏族の守護から大衆のものになってゆくのは、聖武天皇の国分寺発願によって始まると考えられるので、五四〇年代になると、氏族の神、国の造主の寺が、全国的に創建され、或は白山や熊野を守護神とする、法湘宗の山岳仏教が広まり、修験者達の修行の場として、養老山麓、みゆきみちのあちこちに「多芸七坊」が次々と創建されていった様子



です。

天平宝字(七五七
七六四)から約百年の間に、寺の形が出来上ったと
考えられる。勢至千軒、寺三ヶ寺といった隆盛な時もあった様
ですが、其の後三百年間位に焼失したり、廃寺となったり、移
転したり。残った寺院も、真宗に改宗した寺が、永録十年(一
五六七年)頃前後して信長の手勢によって焼きはらわれたとい
う。
往昔の隆盛は、寺跡や竜泉など遺蹟としてとどめているが、
街道であったあたり、数限りない石仏や五輪塔が点在し、苔む
した石仏が昔を語りかけてくるのです。



一三〇四年、志津の地に大和から正宗の十哲、兼氏が刀の鍛
練場を移しており、勢至の地にも鉄座があったと伝えるので、
中世可成りのにぎわいであったと想像出来る。

稚拙な石仏ではあるが、数百年の風霜により、寂莫さを加え
人の世の盛衰を語り伝えている。

仁王門、七堂伽藍を整え、多くの寺坊を備えて栄華を誇った
多芸七坊は、かつてNHKのドラマで、叡山焼打ち、長島一揆
の虚殺を生々しく再現したが、それと同じ運命を辿ったものか
里人が石仏の首まで投げつけて抵抗したと伝える、八千代原の
首なし地藏のはなし。僧、香月がたてこもったと伝える「こも
り山」の地名など、今は語る人もない。

八百比丘尼の勢至の立岩の伝承も、多芸七坊の消滅と共に、
語られなくなったのであろうか、今は知る人も少ない。

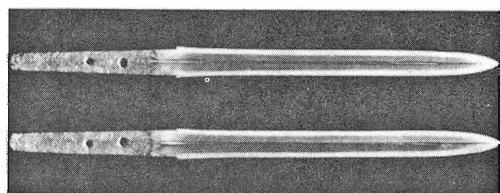
まして「多芸の一ツ火」を見たものは必ず死ぬと云った昔話
は今信用するものもない。

象鼻山別所寺	九九坊
大威徳山竜泉寺	四八坊
勢至山光堂寺	二四坊
柏尾山柏尾寺	二四坊
滝寿山養老寺	一二坊
小倉山光明寺	三六坊
福寿山藤内寺	六坊

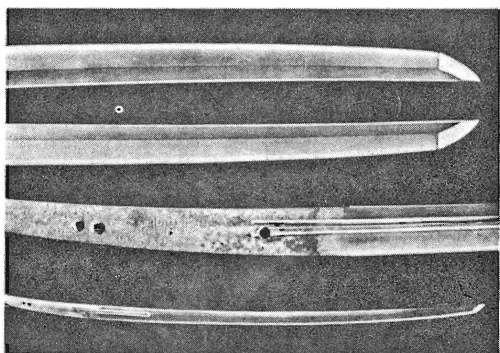


養老寺

県営子供の国の上方五百米程の所に、聖武天皇行宮遺跡の標柱が建てられているあたり、その跡地に、二十余年の後、天平宝字年中、法湘宗の七堂伽藍が建立し、永く繁栄したと伝える。多芸七坊の一ヶ寺、滝寿山養老院で、現養老寺の前寺であると云う。一五六六年、山麓一帯大雨に見舞われ、揖斐川、牧田川が大洪水となり、美濃の平野一帯、海の如くなりました。翌



寺宝 名剣 天国



寺宝 太刀 栗田口国光



十一面千手観音立像

年までこのデルタ化した水が残ったのか、織田信長の手勢、蟹江城主、滝川一益の軍勢水路を利して、多芸野の寺をことごとく焼打ちし灰塵に帰したという。今は寺跡と覚しい地域に、香月屋敷、堂の庭、天狗小場の名をとどめるに過ぎない。

天正十九年（一五九〇）大垣城主伊藤尾門守祐盛が、船岡の地に小堂を再建し、慶長十二年（一六〇七）高須城主徳永寿昌が同所に今の寺を復興した。

滝守不動尊の短剣、国の重文、天国又は久国と伝える。家康が関ヶ原戦勝記念に奉納したと伝える、新藤五国光又は栗田口国光の作と云う、重文の太刀を寺宝とし、又一メートル程ではあるが国重文の鎌倉期の寄木造り、十一面千手観音立像を宝物殿に安置する。

昭和五十五年中興開山した、西美濃三十三霊場の一つとしてにぎわいをみせ、不老長寿の祈願寺としても訪れる人が多い。

源氏橋哀愁

歴史上武士の時代の到来は、一一五六年保元の乱からであるといわれており、三年後の平治元年、平清盛と源義朝の対立が、源平盛衰の宿命的緒戦となりました。

平治元年

(一一五九)

十二月二七日

京都六条川

原での戦に

敗れた義朝

主従僅か八

騎は降りし

きる雪の中

を東国に落



ちてゆくのである。途中十三才の頼朝は一行にはぐれ、十六才の朝長は矢傷をうけて足をひきづり乍らの難行であった。

雪の難所の関ヶ原越はさぞやと思われる一行はひとまず、美濃国青墓の宿にたどり着き、駅の長者大炊兼遠は源氏の縁者で、この娘延寿は義朝との間に夜叉姫をすでもうけている。

ここで、川口半平氏の物語濃飛史「青墓の悲劇」の一文を引用させてもらう。

一家の者にあた、かく迎えられて、義朝の体の冷えも、心の水も溶けたか、今は一刻も猶予している時ではない。

義朝は一同に言った。

「義平は東山道を攻め上れ、朝長は信州へ下り、甲斐、信濃の源氏共を催して、京へ上れ。」

わしは兵を集めて東海道から攻め上るであらう。雲が晴れたら、敵の手が回るのも早い。急いで事をはかれ」

「心得ました」と義平は頭を下げた。

義平、十九才、母は三浦義明の女とも言はれている。悪源太となる程の東国の豪の者に生長している。二男朝長の母は相模波多野義通の妹、三男頼朝の母は熱田大宮司の娘、嫡流として源氏を継ぐ家柄なのである。

雪は尚やまず吹き荒れている。

痛む足をふみしめて朝長は歯をかみしめ乍ら雪の中を歩いて行った。

気の荒い関東武士、義平と、嫡流として義朝が目进行ける頼朝の中にいて、たえずひけめを感じ乍ら育った気弱の朝長の「あわれさ」を文中に更に強める。

夜半、凍えた体を気力で支えて、朝長は、大炊の邸へもどつて来た。

「申しわけありません。傷の痛みに堪えかねまして……」朝長のことを聞いて義朝はふきげんに言った。

「ああ、頼朝なら小さくとも、こんなことはなからうものを」父のことを朝

長は刃で刺し通されたように心に受けた。

「よんどころない。さらばこゝにとどまれ」と、義朝言つたが、朝長の心は決まつていた。

「父上」

傷のため熱ばんだ朝長の体は、悪感にふるえていたが、紫色のくちびるを開いて言つた。

「それがし、命を惜しんで立ち帰つたのではございませぬ。この傷では、しよせんものの役に立つとも覚え、敵に生捕られて、はずかしめを受けるより、父上のお手にかゝつて心残りのないようにと存じまして……」

しばらく、父子無言がつづく。

朝長のことが、さすが義朝の心にひびく。

「そうであつたか、おまえは不覚者と思つていたが、まこと義朝の子であつた。さらば念仏を申せ。」

刀を抜こうとするを、大炊と延寿が取

りすがり、「あまりと言えば無残な……」

と泣いてとどめるので、

「いや、あまり憶病だから、励ましただけのことだ」といって、義朝は刀をおさめた。

大炊や延寿もさがり、夜も更けて、あたりが静かになると、義朝は朝長の寝所をのぞいて、「大夫はいるか」と呼んだ。

「お待ち申しておりました」と答えて、

朝長は静かに床の上に正座する。

幼い時から母の慈愛の手をはなれ、父の愛も薄かった、この幸せ少ない少年はそれでも父義朝の子たりしことを誇りとして、父の手に安んじて討たれて死んでいった。

「都では鎌田に言いつけて、娘を討たせ、頼朝の行方はわからず、今また朝長をもわが手にかけた義朝の心の内はどんなであつただろうか。

朝長の墓は、宿跡の北方、円興寺山腹の雑木林の中に七百年の苔をかぶつ

て、哀愁をそゝる。

義朝は、大炊の弟、

鷲津の玄光坊（現養老

駅の南辺に居住）の案

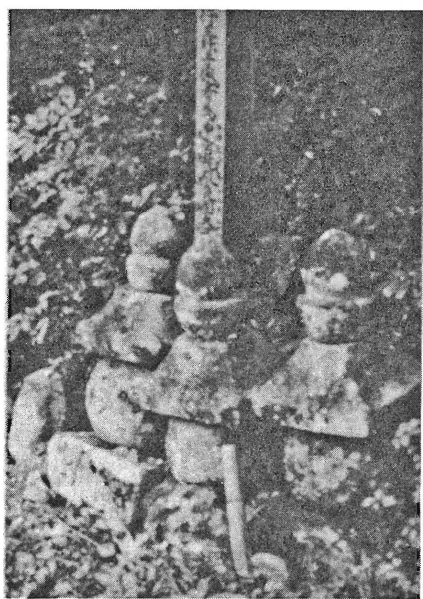
内で、ひそかに知多の

野間の長田莊司忠致の

館に下る。長田は鎌田

政治家の妻の実父である。

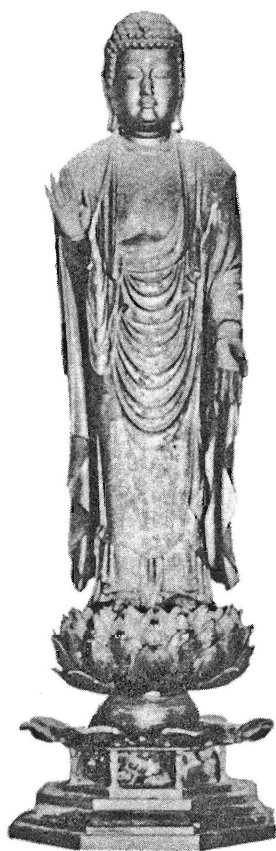
その頃の川筋がどの



源朝長の墓、後世の人があわれんで、義朝、義本の墓を左右にそえた伝

ようであつたか、杭瀬川は江戸時代にシ
 ユンセツされているので今の様ではな
 かつたろうし、表佐川が直江に流れて、そ
 の下流で牧田川と合流して飯ノ木辺で太
 きな川筋になっていたものか、川筋は何
 本も何本もあつて、下池にそそぎ、大川
 に通じていたのであろうか。江戸時代津
 の港（津屋）で川巾六間、深さ六尺とい
 う記録があるので、今とは全く様子が異
 なつていたと考えられる。

養老駅の東に笹りんどうを刻んだ石の



南無釈迦牟尼仏 県重文
 （身延別院妙見山）

橋が史跡として保存されている。義朝が
 此処で大きい舟に乗り換えて、薪の中に
 かくれて、野間へ落ちたという地点であ
 る。

鎌田兵衛鎧掛けの榎と義朝が食事に蘆
 を切つて使用し、さかさに土にさして源
 氏再興を念じたと伝える逆さ蘆の一叢が
 ある。

義朝は野間の長田の館で、不意を襲わ
 れて、無念の最後をとげたのであるが、
 美濃の国にはこうした戦国無情の物語が

数多いのである。

「義朝の心に似たり秋の風」野晒紀行
 の中で芭蕉の心にふれたものは、義朝、
 朝長の心であらうか、或は、今若、乙若、
 牛若三子の母常盤が青墓宿で土族におそ
 われ、非業の最後をとげたことについて
 であらうか。

直江志津

刀聖相州正宗の十哲、志津三郎兼氏は西暦一二七八年弘安元年大和国千手院に生れ、父は長包、母は備前刀匠元重の女、十三歳の時から大和の刀匠手搔包永に師事し包氏と称した。西暦一三〇四年嘉元二年二十七歳の時、美濃の守護土岐頼兼の招きに応じ大和国から美濃国志津村へ移住し、その鍛冶屋谷に鍛錬所を設け、名を兼氏又は志津三郎と改め、正宗の十哲で関鍛冶の祖と云われる刀匠金重の女を娶り三児を挙げた。西暦一三三三年正和二年三十六歳の時、正室の門に入り志津村を離れ、約二十年修業して西暦一三三四年志津村へ戻り、九年の後、西暦一三四三年康永二年の秋六十八歳で病歿した。

鎌倉末期の頃には全国的に刀匠の大移動が行なわれたといわれ、養老山麓に開けた伊勢街道が最も繁昌した時代にあたり、その往来の賑わった沿道の志津村を彼等一門が永住の地に選んだものであろう。尚且志津の山から産出する特異な赤土中に鍛刀に適した粒鉄を発見したためでもあろう。

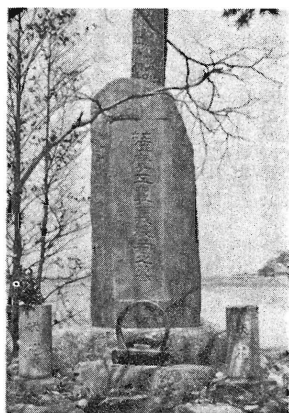
ところが鎌倉末期頃から西濃の湿地一帯に輪中の築堤が創まり、農民の血のにじむ努力が次第に稔り、悪水の制圧が成功を納めて来た。この輪中の勃興に伴って交通路の開発変遷が起き

て来た。即ち足利期に入ると鳥江村、栗笠村、船附村の所謂三湊から諸方面へ向って舟便が開け、又その港へ新道が開通し、旅人の人氣を博した。この新道は美濃中道と称し、地元では一般に鎌倉街道と呼び、今もその跡形が窺われる。この新道が開けるまでは、近江路から美濃を経て尾張方面へ向う旅人の多くが、直線で比較的行を阻むものの少ない養老山麓の伊勢街道を利用し、桑名の港から所謂七里の渡と云った舟便で熱田港へわたる交通がさかんであった。三湊から舟便が開け、美濃中道が開通して以来、その利用者が増え伊勢街道筋が衰微しはじめた。兼氏が帰村した建武元年を少し過ぎた頃、弟の兼俊（一説には次男という）は先きに大和国から従って来た兼友（包友一説には兼氏の弟ともいう）門弟兼利たち一門を引連れ、新道の美濃中道（鎌倉街道）に沿う直江村へ移り、新に鍛錬所を設け、西暦一三六二―七年貞治の頃さかんに鍛刀し、後世直江志津と称し觀賞される名作を遺した。

斯様に輪中の勃興に伴って起きた交通の変遷が与って、刀匠直江志津派が生れ、鎌倉時代から南北朝時代へかけて、志津派直江派関派の三派が鼎立し覇を競い繁栄したが、やがて志津派が衰え、つづいて直江派も衰え、室町時代末には中心が関派と赤坂派に移り、就中関派は益々盛んになったという。

宝暦治水のこと 薩摩義士

美濃には木曾・長良・揖斐の三大川あり、網の目のように支流をもち、その水害にはたえず苦しめられた。しかし近世の美濃国は幕府直轄領・旗本領・藩領錯綜し、全体的統一的治水策を立てえなかった。幕府は宝暦三（一七五三）年十二月油島新田地先の締切堤工事と、大樽川洗堰工事を中心とする大治水事業、いわゆる宝暦治水を、政略上より全く無縁なる薩摩藩主島津重年に命じた。この工事の発案者は、工事区域がほとんど尾張



藩領と幕府領とであり、特に工事の中心地石津・海西両郡には尾張藩支藩の高須藩領が一万五千石もあつた点より、尾張藩主徳川宗勝ではなかつたかと想像されている。

薩摩藩は翌四年正月家老平田靱負正輔を総奉行に、大目付伊集院十蔵久東を副奉行とし、閏二月二十九日安八郡大牧村（現在養老郡養老町池辺）の役館（豪農鬼頭兵内宅を仮用）に到着した。その工事は翌五年三月二十八日竣工したが、藩が大阪町人に借財しながらこの大工事に投じた経費は、当初予算金三〇万両をはるかに超過して四〇万両に近く、これを返済するに二十四年を要したという。

治水工事に出張の薩摩藩士にして自己の分担工事の遅延の責を負い、または工事監督の幕府役人の冷酷な処遇に憤って割腹した者五十二名に及んだ。本工事は四カ所に分けられ、それぞれ数名の現場主任が中心となつて進められたが、その



十六名のうち二名病死者を除いて全員割腹している。この難工事に当つた人々の厳肅な責任感に胸をうたれる。また工事の場所が低湿で不衛生、宝暦四年六月、八月疫病（赤痢という）流行し、病死者三十三名に達し、それらほとんどが足軽・仲間・下人という下級者であつたことは、その悲惨な生活と苛酷な労働とを思わせる。総奉行平田靱負は予算の莫大な超過と犠牲者の続出に全責任をとり、万事を終えた宝暦五年五月二十五日割腹した。これら義歿者の墓は、現地の数カ寺に存在している。

滝を背景にして四季それぞれの趣きがある美しい自然のたたずまい、県営・養老公園も、日本人の心のふるさととしての姿をそなえるまでには、多くの人々の「観光地づくり」の情熱と開拓の努力がありました。生涯を建設にささげた人、全財産を費やした人もあって、一樹一石、これらの人々の情念と人生史を秘めています。

その昔、天正帝が養老観光第一号として行幸されたころの養老山麓は、東西の交通路として賑い、多芸七坊が建ち並び、すばらしく繁栄したようですが、鎌倉時代から西南濃のデルタ地帯に輪中堤が造られたことで交通路が変り、室町時代的美濃中道、江戸時代の中山道と、山麓の路筋は衰微していった模様です。しかし江戸時代中期に入って「養老孝子伝」が大日本史に採録され、十訓抄などの説話文学が庶民の読物となり、名士文人墨客が盛んに訪れ、画版や絵文にもなつて国中に喧伝されました。

養老公園の開園は明治十三年ですが偶然のことではなく、当時、島田村高田元町の岡本喜十郎という一家、四代の方々の百年にわたる薬湯事業の開発辛苦の温泉経営があつたことです。明治十二年、松方大藏卿が観業普及のために岐阜遊説のとき、県は旅情をなくさめるために県下唯一の景勝の地養老へ案内した折――

「公の園として養老を整備するよう」大藏卿は要請し「必ず閣下の御意に叶うべく努めます」と小崎県令は誓言したとか――

その後、小崎県令は、南宮神社宮司で島田村高田の素封家・柏淵静夫氏に松方公の内旨を伝え、公園開発の発起人十名の人選と委嘱があり、それぞれの資産に応じ割当金を仰せつけられた。当時のお金で四千円の資金を集め、民有地十町歩を買い上げ「上地」とし、官地と合せて四十町歩の公園計画を進めました。

計画書が出来ると同時にだちに整備を実施し、日蓮宗・妙見堂、真宗・大谷説教場を誘致して信者の浄財と労役により道路を改修、桜や楓樹を植えましたが、開園に到るまでの資金を更に必要として、あらためて六十五名に県令の委嘱状が手渡され、それぞれの資産に応じて上納金が申し渡されました。岡本喜十郎氏が観光事業の拠点として建築した千歳楼は、六十年もたった古びたお粗末なものであつたので、その際に改築され、多芸郡内の有力者と住民の総意で六ヶ月で「養老公園」開園となりました。

資金を寄進し、浄財を集め、労役を奉仕した苦心の開園の喜びは、祝賀式

養老公園

に集中してかつてない盛大な開園となつたのでした。多くの来賓や地元有力者を招き盛宴が張られ、料理は名古屋の料亭・河文が引うけ、材料を名古屋から運び、調理人・酌人も河文の主人が同伴しました。

この当時、明治十年の西南の役以来、花火打上げが全国的に禁止されてしましたが、開園の余興に大煙花が企画され、小崎県令の特別な計いで、西美濃は三河とともに全国に知られた花火どころでもあり、住民の喜びのためとの理由で養老公園の開園式にのみ特に許可がおりました。花火師たちは大喜びで腕によりをかけて製造した自慢の花火玉を持ちより、まる二昼夜、四十八時間、野も山も、丘も、観客で埋めつくされ、打ち終るまで丸二日間、帰る人もなく、野宿して美玉の乱舞に酔つたといふことです。

一ときも休まず打ち続けました。野も山も、丘も、観客で埋めつくされ、打ち終るまで丸二日間、帰る人もなく、野宿して美玉の乱舞に酔つたといふことです。

養老年譜

古墳時代 日本武尊と御幸街道
六七二 壬申の乱と伊勢街道
七一一 天正天皇行幸
七四〇 聖武天皇行幸
七五七 多芸七坊建立
七六九 不破内親王、勢至に落ちる

一一五七 源義朝、鷲の巢に落ちる
一三六〇 志津兼氏、直江に移る
一三九三 足利義満、観瀑
一五六七 滝川一益、多芸七坊焼く
一七七七 岡本喜十郎、薬湯創業
一七八五 備州藩士・近藤篤、詩碑
一七八八 紀州公、観瀑
一八一〇 笠松郡代・観川惟一、詩碑
一八一六 土佐藩士・細川十州、詩碑
一八一九 尾州藩儒臣・秦滄浪、詩作
一八二八 田中大秀、詩作
一八二八 頼山陽、詩作

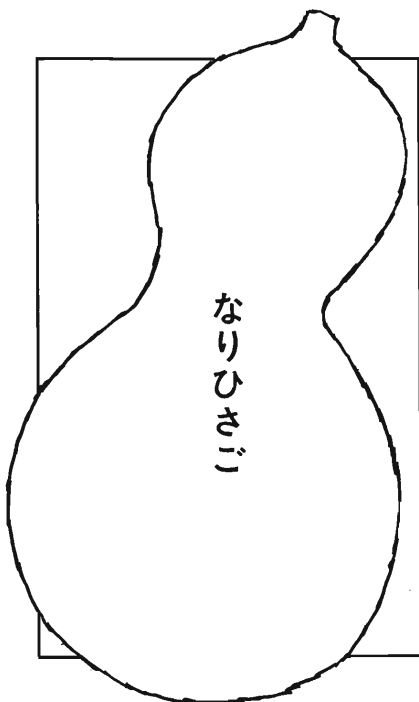
明治十三年 養老公園開設

十七年 田能村直入、観瀑
二十年 長州・杉孫七郎、観瀑
三十年 神戸文左衛門、空谷園を開く
三一年 伊藤博文公、来養
四二年 大正天皇東宮、行啓
四三年 星巖詩碑建立
青蓮院宮、観瀑
大正 二年 養老鉄道、
大垣・養老間、開通
五年 富岡鉄斎、観瀑
八年 養老鉄道、
養老、桑名間、開通
昭和 十一年 養老鉄道、電化
二年 北原白秋、来養
四年 弘田龍太郎、来養
五年 藤井秋水、野口雨情、来養
九年 河東碧梧桐、来養

ひょうたんは古来、なりひさご、ひさご、ふくべ、ひょうたんと呼び愛用してきたものである。その起源は飛鳥奈良の時代にわが国へ仏教が伝来し、政治制度の改革に唐の諸制度の模倣が行なわれたころ、大陸の文化がさかんにわたって来た。ひょうたんはそのころにはじめて渡来し、一部で栽培もはじまり、上流の社会ですこぶる珍重し愛用された。中国では比較的、南方の地方で古くから栽培し、もっぱら農家の種子入れに使用された。ひょうたんに種を貯蔵すると、何年たつても発芽するといわれる。台湾や南方諸国では主に飲み水の容器になり、楽器にも使われる。わが国では、もっぱら酒器に使われ、ひょうたんのお酒は一段と風味を増すといつて、今日でも愛用する向きもある。ひょうたんの栽培が一般に普及したのは江戸時代で、三河、近江、和泉、安芸、肥後、

阿波、伊予の諸国が主な産地であつた。昔は竹筒、タル、陶ツボ以外に適当な容器のない時代に、軽くて比較的堅ろくなひょうたんの栽培が想像以上にさかんであつた。三河産のものは皮はだは薄いが姿

なり、和泉産は大瓢が特徴で二瓢、三瓢もはいる大瓢を産した。安芸産のものは、好者（すきしゃ）が柚子肌（ゆずはだ）またはだいいはいだといつて愛ぶする。皮肌は厚いがなめらかでない雅瓢を産し



なりひさご

優れ、雅瓢（がひょう）として愛がんされるものが多く、近江産は長瓢（ながひょう）が特徴で、明治ごろまではせいぜい一匁ほどが最長であつたが、今では栽培が進歩し、二匁に近い長瓢を作るように

肥後では土質がふさうためか皮肌が最も厚い堅ろくな目瓢といつて喜ぶ瓢を量産した。四国地方では松皮膚（まつかわはだ）という松の木のかわを思わせる瓢ができ、各地方の風土によつてそれぞれ特徴

あるひょうたんが栽培された。かたちは、直瓢、長瓢、中長瓢、達磨瓢、簞瓢、雁瓢、立姫瓢、花向（はなむかい）瓢、また動物の姿に似たものにそれぞれ名前をつけて愛がんとしたが、おしなべて上戸は直瓢系を好み、下戸は雅瓢系をもてはやした。

ひょうたんの歴史は、かうにわが国の文化史上もほえましい存在であるが、室町時代からこれがいろいろの文様に、図案にまた器形に応用せられ、永く国民から親しまれ江戸期には遠州好みなど茶道の好みに用いられた。



昭和55年10月17日 養老公園開設百年記念
岐阜県養老町役場商工観光課内養老観光協会